

犬と私

金川純平

以前、著名な小説家の「飼い犬の自殺」というタイトルのエッセイを読んだことがあります。飼い主が、元気がなくなったその犬を、友人の動物病院に連れていった時のこと……。

レントゲン他精密検診の結果、末期の肺がんと判明、すでに余命いくばくもないという医師からの説明をその犬とともに聞き、一緒に帰宅したあと間もなく、座敷犬として育ち、日課の散歩しか外に出ない犬が突然家を飛び出し、車道に向かって走り出し、向かってきた車の急ブレーキも間に合わず衝突し、即死！すでに末期症状にもかかわらず全力で走り出す体力が残っていたことも併せ、迷うことなく車にまっしぐらに突進してしまった驚き、自殺としか思えないという話だが、その犬は初めての動物病院の見たことのない異様な雰囲気と帰宅後の家族の様子に犬なりのショックを受け、気持ちが激しく動揺し、自動車事故となってしまったというそのエッセイ！本当にそんなことがあるのだろうか？

それで私の話・その①

私が小学校 3 年生頃から、生まれたばかりの子犬と私とはまるで兄弟のように寝食を共にし、成長してきたのですが、10 年後の春大学進学のため、山口県下関市から東京に行くことになりました。希望通りの大学に合格し心ウキウキし、その犬とのしばしの別れの状況も、記憶にないほど新生活に明け暮れた三か月後の夏休み直前、故郷の親達からその犬は死んだ！とほとんどさりげない表現の連絡がきたのです。

えっ！というタイムスリップ！「そういえばあいつはどうしているかな？死んだっ？本当っ？」

私に連絡する前に簡単な葬儀を済ませ、死骸は関門海峡に流したとのこと、今思えば必要以上の反応を恐れた親達の私への深い配慮だったのかも……。犬の寿命からして不自然ではないが、あんなに元気だったのに。ほとんど毎日一緒に散歩では自分より大きな犬に立ち向かう強気の持ち主が、真夜中の雷鳴に震えながら飼い主の布団に潜り込むという一面を見せ、私が歌を歌えば遠吠えして合唱……！

血統書付きのフォックステリア、かわいらしくも気品あるハンサムなオス、しかしその血統は闘争心いっぱいの猟犬でいつも私と張り合おうとする男の子でした。東京の下宿でひとり、関門海峡・壇ノ浦の流れに浮かび、瀬戸内海と日本海を行ったり来たりの淋しそうに寝たまま無表情の「あいつ」の情景が浮かんできます。急に私がいなくなってひとりぼっち、三か月したら夏休みで初めて帰省のはずが、犬にとってはほんの少しの間ということにはわからず、淋しかったのだろうなあ、あいつ！死ぬほど……という思いが今でも残ります。

さらに私の話・その②

社会人になりたびたび転勤のあるサラリーマン生活、40歳になりたぶん最後の転勤を終え、福岡から東京の江東区門前仲町の社宅に落ち着き一家4人の新生活が再開、しかし多感粗暴な年ごろの息子二人とおまけに私も堂々と負けていない存在は、狭い社宅は砂漠のようでした。

その社宅がペット禁止か確かめないままペットを飼う効能を聞き、ペットショップで生まれたての短毛ダックスフンドのオスを抱き上げたが最後、家族の意見が一致、犬のおかげで一つの家族となれ、実に賑やかな健康な生活が始まりました。

「ジロ」と名付け、かわいそうだが去勢手術はしました。一週間の出張から帰ると奥から泣き叫びながら出迎え、ひっくり返って喜びを表し、残した椎の実の先から水が飛び出すのです(笑)。

それから10数年後、54歳、平成12年春転職することになりました。当然社宅は出るようになるのですが、運よく墨田区押上に手ごろなマンションが見つかりました。しかし契約後にそこがペット禁止でしかもかなり厳しい規則ありとのが判明。社宅生活の延長線感覚、大きなマンションだからペットの一匹くらい黙っていれば何とかなる、おとなしくいい子にしていれば何とかなる、あるいは都内の親戚に預けるか、最悪の場合下関の親戚に預けるか、しかし遠いなあ！と思いつめぐらせていました。

その「ジロ」の持病の甲状腺がんも治療中、併せて糖尿病も患っているせいで視力も低下、犬の寿命からしてかわいそうだけれどあと4・5年持てば・・・と！

引っ越すまでの狭い社宅内、「ジロ」を膝の上に抱えて家族4人で話し合い、色々なところに電話相談、上記「飼い犬の自殺」や上記①などすっかり忘れていた対応策協議相談の日々でした。

男3人が出払った秋の日、いつも通りの朝食後、妻の膝の上で居眠り最中の「ジロ」の呼吸が急に怪しく乱れ苦し気にしばらくその状態で、大声の呼びかけにも反応なしだったので、そっと座布団に移し、病院へのタクシーを捕まえに大通りへ出ても捕まらず、いったん戻ると「ジロ」は、座布団の上で静かに寝入ったままだったが、再び抱き上げると一度大きく目を開き大きく息をして、そして首がカクンと、それが最期だったとのこと！

その知らせを聞いてしばらくして、しまった！もっと優しく、賢く、気を使うべきだった！

昔、同じようなことがあったじゃないか！エッセイも読んだじゃないか！

・・・もうすぐこの社宅もでるらしい、皆どこに行くのだろう、どうやら俺は一緒ではなさそう、そうしたら俺はどこへ行くのだろう、皆とはもう会えなくなるのだろうか、体もきつい、もうほとんど目も見えない、もうすぐ死ぬのだろうか・・・

その後「ジロ」は、墨田区両国回向院動物霊園にお願いしました。時々思い立った日に線香持参、「最後は病弱だったけどペットとして14年も生きたのだから寿命だよな、仕方ないな・・・」手を合わせながら毎回ぶつぶつと呟いてしまいます。 終わり

(慶大経済学部卒 元経営幹部職 77歳)

2023年11月